

# 「学びに向かう力」を育む遊び環境についての一考察

## Playing Environment to Foster “Learning Power”

澤田愛子

### 要旨

平成29年3月に告示された『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』において育みたい資質・能力が「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱に沿って具体化された。その中で「学びに向かう力、人間性等」は、「心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか」という文言が明記されている。そこで、生涯にわたる人格形成を培う重要な幼児期に、「学びに向かう力」がどのように育まれるのか、また、その遊び環境を具体的な事例を通して考察し、幼児教育の質を高めていく。

キーワード：学びに向かう力 遊び込む経験 環境の構成

### 1. はじめに～予測困難な時代を生きる子供たち

今回の学習指導要領の改訂について、平成28年12月21日の『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び方策等について（答申）』では、「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる」<sup>1)</sup>ということである。また、「近年顕著となってきているのは、知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきていることである。」<sup>2)</sup>そして、「人工知能がいかに進化しようとも、それが行っているのは与えられた目的の中での処理である。一方で人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる。多様な文脈が複雑に入り混じった環境の中でも、場面や状況を理解して自ら目的を設定し、その目的に応じて必要な情報を見出し、情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり、相手にふさわしい表現を工夫したり、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすることができるという強みを持っている。

このために必要な力を成長の中で育てているのが、人間の学習である。・・・必要な力を身

に付け、子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。』<sup>3)</sup>と明記されている。

今後ますます少子高齢化が進み、50年後には約8000万人、80年後には6000万人ぐらいとなり、今の人口の半分ぐらいになるとの予想もある。こうした状況の中でも、自分本位の考えで生きるのではなく、仲間や他の人達と一緒に共に生きていけるような豊かな人間性を持った子供を育成していくことが重要である。

## 2. 「学びに向かう力」を考察する視点

平成29年3月に告示された『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』において育みたい資質・能力が「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」とされた。また、それらは、相互に支え合い、循環して伸びていくので、一体的に指導されるべきであるとされた。

「学びに向かう力」については、「・思いやり ・安定した情緒 ・自信 ・相手の気持ちへの受容 ・好奇心、探究心 ・葛藤、自分への向き合い、折り合い ・話し合い、目的の共有、協力 ・色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚 ・自然現象や社会現象への関心等」<sup>4)</sup>が明記されている。

無藤氏は、「情意としての学びに向かう力とは意欲や意志であり、難しい課題に挑戦し、取り組み続けようとすることである。学びの過程を支える力であり、そこでの困難にひるむことなく工夫し続ける姿勢である。事態を探究し、新たな情報を探し、再び考える。人と協力し、課題解決へと協働していく。」<sup>5)</sup>また、「その学びに向かう力がいずれ個人としての生き方に結び付いて、その後の生き方を支えるものともなる。」<sup>6)</sup>と発言されている。

これまでの幼児教育も、保育者との信頼関係を基盤に遊びを通して主体的にかかわることで、心情・意欲・態度などを育ててきた。特に人格形成の基礎を培う幼児期に、学ぶ楽しさや面白さを実感することは、生涯にわたる学ぶ土台となっていく。幼児期は人とかわりながら、新たなことに気付いたり、疑問をもったり、繰り返し試したりするなど、夢中になって遊び込む中に学びがある。そこで、保育者が幼児理解を深め、子供の発達する姿を読み取り、学びにつながる援助や環境の構成をしながら幼児期の遊び（学び）をみつめてきた。

さらに、「近年、国際的にも忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力といったものを幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるという研究成果」<sup>7)</sup>があり幼児教育への重要性が注目されている。その内容は、「学びに向かう力」と非常に関連が深い。このように、生涯にわたる人格形成において重要な

幼児期だからこそ、幼児教育の質を高めていくことが重要である。

そこで、著者が勤務していた神戸市立東灘のぞみ幼稚園での平成20年度、神戸市立幼稚園教育研究会（東灘、灘、兵庫地区）の実践事例や、神戸市立御影幼稚園での平成25年度、全日本音楽教育研究会全国大会兵庫大会（幼稚園部）の研究発表及び2年間の取組事例から、幼児教育における「学びに向かう力」がどのように育まれるのか、また、その遊び環境を考察していくこととする。

編集代表岡上直子『ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成～3・4・5歳児の主体的・対話的で深い学び～』では、「①子どもの姿の読み取り・評価」<sup>8)</sup>について「まずは、目の前で遊びや生活の様々な活動の中で、子どもたちは、どのようなことに興味・関心をもって活動を楽しんでいるのか、どのような力が身に付き、発達しているのかなど、子どもの姿から読み取ります。このようにして読み取った内容が、「子どもたちが経験している内容」であり、「遊びの中での学び」言うこともできます。」<sup>9)</sup>と明記している。

そこで、方策としては、事例の中で、子供の姿を読み取った内容を「遊びの中での学び」で示す。ただし、子供は発達の特徴から「遊びの中での学び」については、5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）が絡み合って様々な学びをしている。ここでは、事例で読み取った遊びの中での学びを書いている。読み取りは、「読み取り」で示す。また、事例ごとに考察し「学びに向かう力」を育む環境を二重下線で示すこととする。

### 3. 事例を通して（1）（2）の視点について考える

（1）「遊びの中での学び」（2）「学びに向かう力」を育む環境 読み取り

#### ●友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう体験

事例1 「かくれんぼがしたい」（2年保育4歳児 4月）

入園当初、I児は遊びを傍観し、朝の準備が終わると、自席に戻っていることが多かった。保育者が「Iさん遊ぼう」と誘いかけると、同じように遊ぶ。やがて、保育者が誘い掛けなくとも、自席から離れ、保育者のもとに近づいてくるようになった。外遊びが好きで、滑り台に興味をもつようになってきた。

初めて経験する集団生活では、何をして遊んでいいのか、分からない。自席が一番落ち着く場所であるようだ。保育者に誘われたり、一緒に遊ぶことで、少しずつ好きな遊びを見付けたりしている。

初めてI児から「かくれんぼがしたい」と保育者を誘いに来た。「しよう」とI児の提案に賛

成し、周囲の子供にも声を掛ける。I児は保育者の動きを気にしながら、年長組の部屋近くに隠れ、ちらちらと様子を伺っている。保育者が他の子供を先に見付け、みんなでI児の名前を呼びながら探し、ころあいを見計らって「あ！いた！」と皆で見付けると、I児は「絶対見付からないと思っていたのに」と気持ちを表現しながらも、にこにこ満足している。

その後も、鬼役をしたいと保育者に伝えたり、自分で見付からない場所を考えて隠れたりしてかくれんぼを楽しんでいる。

保育者と信頼関係が徐々にでき、保育者と遊ぶことが楽しくなってくる。自分のしたい遊びを見付け、保育者に思いを伝えながら、自ら遊び出す姿に変化していつている。保育者や友達に自分を見付けてもらったことが嬉しく、自信をもって隠れることを楽しんでいる。

#### 〈考察〉

保育者との信頼関係は、子供の生活の基盤である。保育者と一緒に遊んだり、見守られたりすることで、安心感をもち、自分の思っていること、感じたりしていることを伝えながら自分を出していくようになる。I児は、毎日保育者に声をかけられることで、保育者に親近感をもち、一緒に遊びたい思いを伝えられる場になっている。

2年保育の4歳児4月は、集団生活に入ったばかりである。“かくれんぼ”という集団遊びが友達と触れ合え、ワクワク・ドキドキする環境になっている。このように友達と一緒に体を動かす楽しさを感じられる遊びを積み重ねていくことで、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうようになる。保育者が一緒に遊びに入り、参加している子供の心と心をつないでいくように意識していくことで、友達の存在に気付き、さらに遊びが楽しくなり、自分なりの思いを表現するようになってくる。

#### ●身近な自然に触れる体験

##### 事例2 「ダンゴムシさん、おうちに帰してあげよう」（2年保育4歳児 5月）

5月に入ってから、子供たちはダンゴムシを探したり、「だんごむし体操」をしたり、ダンゴムシになって身体表現をしたりして遊び、ダンゴムシが大好きになってきた。

ある日、A児が「先生！ダンゴムシ見付けたよ！」と嬉しそうに見付けたダンゴムシを見せにきた。保育者が「本当だ！小さいね」と言葉をかけると、A児は「うん！赤ちゃんダンゴムシだから！」とカップに入れ、「葉っぱのお布団、入れてあげよう」「ダンゴムシさん、お花も好きかな？」と、好きな遊びの時間もずっと大切に持ち歩いている。

片付けの時間になり、保育者が「Aちゃん、そのダンゴムシさんどうするの？」と尋ねると、「おうちに帰してあげるの」とA児は言う。「Aちゃん、優しいね」と保育者が言うと、「だって、まだ赤ちゃんだからね！また遊ぼうね！」と、ダンゴムシを元にいた場所に帰し、手を振っていた。



「だんごむし体操 楽しいね」



「ダンゴムシさん、ひっくりかえったよ」

A児は、毎日ダンゴムシを見付けたり、ダンゴムシになって身体表現をしたり、「ダンゴムシ体操」をしたりして、心も体もはずませて遊んでいる。このような体験の積み重ねから、ダンゴムシと自分を重ねあわせて、ダンゴムシを家に帰してあげようと思う気持ちになったのだろう。

〈考察〉

ダンゴムシ探しは、我を忘れて夢中になり、しぜんに保育者や友達と言葉を交わすことができる遊びである。また、ダンゴムシ探しに意欲を示すA児は、友達と一緒に身体表現をしたり、「ダンゴムシ体操」をしたりして体を動かし、イメージを表現できる環境があることで、ダンゴムシの気持ちになりきっている。

事例3 「ヒマワリでいっぱいになっちゃうね！（2年保育4歳児 9月）



大きくなあ〜れ  
大きくなあ〜れ

わっ！  
芽が出たよ！

5月にペアの年長児と一緒にヒマワリの種を蒔いた。毎日、ペアで仲よく水やりをして世話をしていると、種から芽が出てぐんぐんと伸び、夏には大きなヒマワリの花が咲いた。その頃、教員がプランターに植えていたヒマワリを1箇所に移動させた。

9月になると花が枯れ、たくさんの種ができたので、ペアと一緒に種取りをした。「いっぱい種ができています！」「前（5月）に蒔いた種と同じだ！」と、子供たちは、種をとりながらいろいろなことを感じている。保育者は、たくさん取れた種の中から一粒だけ取って、子供たちに見せ、「この種一つから、ヒマワリが咲いて、またたくさんの種ができるんだよ」と、伝えた。子供たちは、「すごいね！」「もっと、たくさんのヒマワリ、みたいなあ」と、目を丸くしながらつぶやいていた。



わー大きな花  
花の中に虫がいるよ

子供たちは、実際に種を蒔き、芽が出て伸びていき、つぼみができ、花が咲き、種ができるというヒマワリの成長の過程を、毎日、水やりをしながら興味をもって見ていたので、教師の話をよく理解できたのであろう。その中で、一粒の種からたくさん種ができ、その種からまた花が咲き、種ができるという命の廻りや不思議さを、子供なりに感じることができたようだ。

#### 〈考察〉

ペアの友達と一緒に、ヒマワリの成長の過程に興味をもって見てきた子供たちは、さらに一粒一粒の種にも興味をもち、命の廻りや不思議さを子供なりに探究しようとする心につながってきている。実体験が少なくなってきた昨今、成長のプロセスが直接体験できる環境をつくる必要がある。また、プランターのヒマワリも教員が1か所に移動したことで、多数のひまわりが集まり、まるでヒマワリ畑ようになった。このように子供たちの感性を揺さぶる環境の構成も重要である。

#### ●生命の尊さに気付く体験

##### 事例4 「ツバメの赤ちゃん、どうして死んじゃったの？」(2年保育5歳児 6月)

5月中旬から、年長児は、幼稚園の近くの寿司屋さんの軒先にできたツバメの巣を継続して見に行った。親ツバメがじっと卵を集めているところから、雛がかえり、少しずつ成長していく様子を、子供たちは毎日単しみにしていた。ツバメの巣を見て、「大きくなって、巣がぎゅうぎゅうだね!」「羽、バタバタできるようになっている!」「“お母さん、おなかすいたよ”って呼んでる!」と、いろいろなことに気付いたり、感じたりしている。子ツバメが徐々に大きくなってくると、子供たちは「早く飛んで!」「がんばって!」と、巣立つ様子を楽しみにするようになった。

ある日、子ツバメが1羽見当たらない。寿司屋の店主から「今朝、巣から落ちてしまい、通りかかった自転車で轢かれて死んでしまったんだよ」と知らされ、子供たちは言葉を失った。「どうして、巣からおちたんだろう?」「お空、飛ぼうとしていたのか…」「お母さんツバメ、泣いてるよね」など、ポツリポツリと話しながら幼稚園へ戻った。

翌日以降も、毎日のように子ツバメの巣立つ様子を楽しみにツバメの巣を見に行ったが、今にも飛び立ちそうな子ツバメの様子を見ると「気を付けて!」「大丈夫?」と、ハラハラしながら子ツバメの様子を見るようになった。

子供たちは、継続してツバメの巣を見に行ったことで、子ツバメの成長を楽しみにしたり、何度も餌を運ぶ親ツバメの様子から、親ツバメの子ツバメに対する愛情を感じ取ったりしていた。巣から落ちて亡くなった子ツバメのことを知り、“死”という現実と向き合うきっかけとなったのだろう。

#### 〈考察〉

毎日、元気に鳴いていたあの子ツバメが、親ツバメから餌をもらって嬉しそうに食べていたあの子ツバメが死んでしまったことを、子供たちは信じられない様子だった。

言葉を失う子供たちの姿からも、“死”の意味を5歳児なりにかみしめている。また、子ツバメが巣立つ様子を見ながら「早く飛んで!」と言っていた子供たちが、子ツバメの死を知った後からは、「気を付けて!」と、その様子を見守るようになった。このように、継続してツバメの巣を見に行った環境とともに、寿司屋の店主との出会いが子供の心の成長につながっている。

#### ●挫折や葛藤を感じる体験

事例5 「僕がもっと頑張って勝ち残り、A児に旗を持たせる」(帽子とりより)

(2年保育5歳児 9月)

運動会も間近な9月、5歳児の帽子取り。勝ったチームは、ウィニングランの旗を持ち、園庭を走る。あと一步のところまで、負けたA児は、声をあげて泣き、担任が声を掛けても、気持ちの整理を付けることができない。その様子を見ていた同じチームのB児が、「僕がもっと頑張って勝ち残り、A児に旗を持たせる」と言った。保育者は、B児の言葉に思わず涙が出そうになり、2人を抱きしめ、A児に「涙を拭いて頑張ろう」と伝えると、A児の心も落ち着いてきた。

B児は、チームのために悔し涙を流すA児を見て、自分が頑張ろうと思ったのであろう。また、ウィニングランの旗を自分が持つのではなく、A児に持たせたいというB児の友達に対する優しさを感じる。A児は、悔し涙を流していたが、B児の優しさや教師の温かさに気持ちを切り替えることができたようである。

#### 〈考察〉

その過程には、帽子取りに興味をもった友達と一緒に遊ぶ中で、様々なトラブルを発生させながらも、その都度、話し合い、友達の思いや考えに気付いたり、受け入れたりしながらルー

ルづくりをした体験、勝ったうれしさや負けた悔しさをチームの友達と共に味わった達成感、充実感、満足感、挫折感、葛藤体験等があり、遊び込む経験を通して、友達とのかかわりも深まってきた。“帽子とり”という課題に挑戦し、取り組み続けようとするところに子供たちの意欲を感じる。



●表現する楽しさを味わう体験

「いろいろな音やリズムがいっぱい」

事例6 「わくわく池でザリガニ釣り」(2年保育4歳児・5歳児 6月)



プクプクプク♪

ザリガニがかくれているのかな？

園庭にあるわくわく池には、毎日、異年齢の子供たちが集まってくる。A児「“プクプク”音がするよ」B児「ザリガニが隠れているのかな？」C児「捕まえよう」と、池の周辺にある長い草を見つけてザリガニを釣ろうとする。しかし、草では釣れないことが分かり、次々、小枝や牛乳パックをつなぎ、ザリガニが釣れる方法を試したり、工夫したりしている。

事例7 「どろんこ 大好き！」(2年保育4歳児 6月)



ペタペタ  
パシャパシャ ♪

園庭の土山でどろんこ遊びをするのが大好きな子供たち。「ペタペタ パシャパシャ♪」とリズムにのって楽しそうに遊んでいる友達を見てバケツで水を運んでくる子供。ちょっぴりよごれるのが苦手な側で様子を見ている周囲の子供もどろんこ遊びに心が動き始めてくる。



## 事例8 アイドルごっこ（2年保育4歳児・5歳児 6月）



アイドルごっこが大好きな子供たちである。自分たちで、ステージをつくったり、好きなCD（アニメ曲や園で歌っている曲）をかけたり、歌ったり、踊ったり、楽器をならしたりしている。お客さんも次々集まってくる。

ウオ〜  
ウオ〜  
ウオ〜

事例6の「わくわく池でザリガニ釣り」では、池の“プクプクプク♪”と、ちょっとした音に耳を傾けたことから、ザリガニ釣りに興味をもち始めた。また、その場に一緒に考え合える友達がいることで、試したり、工夫したりしながら何度でも試そうとしているのであろう。

事例7の「どろんこ大好き」では、“ペタペタ パシャパシャ♪”と感じたリズムを声に出してどろんこ遊びをしている。また、友達の楽しそうな様子に周囲の子供たちも心が動き始めたのであろう。

事例8の「アイドルごっこ」では、お客さんの前で、思ったことや考えたことを素直に表現したり、大好きな曲（CD）をかけることができたりすることも楽しいのだろう。

### 〈考察〉

子供は毎日生活する中で、いろいろな音やリズムに出会っている。その出会いを楽しみ、身の回りのちょっとした音に耳を傾けたり、感じたリズムを身体表現したり、あるいは言葉にして表出したりするなど、様々な方法で表現している。また、子供は、遊びを通して音やリズムにかかわりながら、友達とのかかわりを広げ、人とのつながりを深めている。思考錯誤する過程を大切に、子供が心を動かし、主体的にかかわりたくなるような環境が重要である。

## 事例9 「いろんな音が聞こえるよ」（2年保育5歳児 6月）

雨が降り始めると、A児がプリンのカップを片手に、保育室前のテラスの屋根の下へ行き、雨粒を集め始める。A児の様子を見て、B児やC児らも集まって来て、雨粒を集め始める。B児が遊戯室前の雨粒がたくさん落ちてくる場所を見付け、「ここ、いっぱい落ちてくる！」とA児やC児に知らせている。楽しそうな雰囲気気付いた他の子供たちも、「何しているの？」「寄せて！」と次々集まってくる。しばらくすると、A児が「先生、聞いて！」と保育者を呼ぶので、側に行くと、雨粒が容器に入った瞬間に音が聞こえてくる。「わあ、ポチャンっていい音がするね！」と保育者が言うと、B児が「私の音も聞いて！」と言う。「あっ、Bさんののは、ポトンって！」とA児の音と違うことにC児が気付く。「おもしろいね。音が違うね。」と保育者が言うと、周りにいたB児やC児らが「不思議！」「もっといい音がする入れ物、探してくる！」と、新しい容器を次々と持ってきて、試し始める。

いろいろな容器で雨粒を集める音を聞いていると、容器によって音が違うことに気づき、「ポチャン、ポチャン」「トトトト」など、口々に自分の容器の音を表現し始める。「うん、そうそう！」と、友達が口にした雨粒の音に共感したり、笑顔で顔を合わせたりしている。

しばらく試していると、D児が「先生、不思議！聞いててよ」と手に持ったカップを上下に動かす。「ほら、音が変わるの！」と新しい発見に得意気な様子である。また、E児は「だんだん、音がボトン、ボトンってなるよ」と、容器に水が溜まると音が変わることに気づき、友達に嬉しそうに伝えている。

雨粒をたくさん集めようといういろいろな容器を使って試しているうちに、容器によって雨粒の音が違うことに気付いた。これまでに、雨の降る音や風の音など、自然の音に耳を傾けていたが、雨粒の音は、自分が選ぶ容器や雨粒の落ちる場所、容器の持ち方などによって、次々に変化していくことが楽しかったようである。また、友達と一緒に試行錯誤したり、気付いたことを伝え合ったりすることで、より楽しい遊びになっていったのであろう。

#### 〈考察〉

子供と生活する中で、保育者が意識している色々な音に耳を傾ける機会を多くもつことで、子供も身の回りの音に気付いたり、興味をもったりするようになってくる。特に、自然現象が作り出す音は、そのタイミングを逃がさないように捉えるとともに、一人一人のその音の感じ方や表現の仕方を丁寧に受け止めていくことが大切である。自分の感じた音を言葉（擬音語）で表現することも、子供の感性や言葉を豊かに育てる機会である。一人一人の感性を受け止めたり、表現したりする場を十分にもつことで、さらに音への興味や関心が広がっていく。

子供がいろいろな音に興味をもったり、自分で音をつくりだしたりして遊ぶことを楽しむためには、いろいろな材料を試したり、繰り返してやってみたりする時間を十分に確保する必要がある。また、友達と試行錯誤を繰り返す環境や感じたことを共有、共感する協同的な活動を積み重ねていくことが大切である。

#### 事例10 「はっぱがおどっているよ！」（2年保育4歳児 11月中旬）

黄色に色付いたイチョウの葉が、園庭に落ち始めると、子供たちは毎日、葉を集めることを楽しんでいる。強い風が吹き、園庭にたくさんのイチョウの葉が落ちていたある日、クラス全員で遊ぶ機会をつくった。子供たちは「葉っぱ集めよう」「みんなで寝れるくらいのベッドをつくらう」と、両手いっぱい葉を集めて運んだり、一枚ずつ葉を集めて、花束をつくったりしている。時々、風が吹き、葉が舞い落ちてくる。子供たちは「わあーきれい」「くるくるって落ちてくる」「キャッチできるかな？」と、風に吹かれながら舞い落ちてくる葉に興味をもち、イチョウの木を見上げている。存分に遊んだ後、保育室に戻ろうとすると、後ろから風が吹いてきた。イチョウの葉は、子供たちを追い越すように飛んできた。「葉っぱも走ってる」「くる

くる踊ってる」などと言いながら、子供たちは、葉っぱと一緒に走ったり、くるくる踊ったり身体表現をして楽しんでいる。

そこで、保育室に戻り、保育者が子供たちのつぶやきをつなげてピアノを弾きながら歌うと、「楽しい」「2番も考えよう」と、次々に自分の考えを伝えるとともに、「くるくるの時は、手を回したら？」と、踊りを考え始める子供もいる。

子供たちは、イチヨウの葉で存分に遊び、葉の色の美しさや風に吹かれて舞う葉の動きの面白さにも気付いてきた。また、クラス全員が共通の体験をし、子供たちのつぶやきに、簡単なメロディーをつけたことで、歌をつくる楽しさを感じたのだろう。

#### 〈考察〉

4歳児は、実体験の中で感じた素直な思いを歌にすると分かりやすいようである。歌をつくって遊ぶとき、みんなで分かり合うためにも、保育者はクラスで共通の感動体験をすることができるような環境の構成をすることが大切である。また、子供が歌をつくる楽しさを味わうためには、子供が心を動かしたその時をタイミングよく捉え、子供のつぶやきを歌詞にしたり、メロディーに乗せたりする保育者の援助も必要である。

#### ●地域の方々等と触れ合う体験

##### 事例11 「また一緒に遊びたいね」（2年保育5歳児 9月）



毎年続けている高齢者の方との交流。昔から歌い継がれている童謡「むしのこえ」を一緒に歌ったり、楽器を鳴らしたり、わらべ歌「げんこつやまのたぬきさん」で遊んだり、昔遊び（お手玉）をしたりして、心がつながる交流となっている。子供は、「おばあちゃんの手、しわしわだ」「握手したら、柔らかい」と、話したり、高齢者も「かわいいね」と、微笑んだり、子供の頭を撫でたりするなど、子供も高齢者も大喜びである。子供たちにとっては、高齢者の温かさに触れた一日であった。

##### 事例12 「だんじりごっこ楽しいね」（2年保育5歳児 6月）



園の特色の一つとなっている“だんじり”の取組である。毎年5月に、この地域をあげての盛大なお祭りがある。子供たちは、そのお祭りに参加したり、見たりすることで益々“だんじり”ごっこが好きになる。地域をあげて、“だんじり”を後世に継承していこうという気持ちが強く、「エッセだんじり」（地域の方から寄贈された孫だんじりを曳き回し、太鼓や鐘を鳴らす“だんじり”ごっこ）の取組でも、地域の方の支えがあってこそできる取組である。また、地域の方からは、古くから受け継がれているものを大切にすることも教えていただき、“だんじりの”遊びの後には、孫だんじりを拭き、大切にしようとする子供の姿も見られる。

高齢者との交流では、互いによく知っている「むしのこえ」という童謡を歌ったり、触れ合い遊びをしたりしたことが、子供と高齢者の方々の気持ちをつなぐきっかけになっている。地域の交流では、子供たちがお祭りに参加したり、見たりすることでだんじりごっこが好きになっている。また、地域の方々との温かい支えがあり、古くから受け継がれているものを大切にすることも教わっている。

#### 〈考察〉

高齢者や地域の方々の温かい気持ちに支えられ、子供たちは、人に対する優しさや愛情を育てている。このように、人と心のつながりや次代に受け継いでいく気持ちを大切に育てていくことができる環境が重要である。また、“だんじり”の文化や伝統に親しむことで、子供は、地域の人々とのつながりを深め、自分を取り巻く、社会とのつながりにも関心をもつようになってくる。近年子供たちの人と関わる力は低下している。こうした状況の中で、園は計画的に、高齢者をはじめ地域の人々などと積極的に関わられる体験の場を取り入れていくことが大切である。

#### 4. 「学びに向かう力」がどのように育まれるのか、また、その遊び環境とは

本稿の事例から考察した「学びに向かう力」とその遊び環境は、以下のとおりである。

「学びに向かう力」は、事例1からも、保育者との信頼関係を築きながら、子供が安定していくように、そして、「自信」をもって行動するという姿を援助していくことが重要である。子供は、“かくれんぼ”や“鬼ごっこ”などの集団遊びの中で、見付からないようにドキドキしながら隠れたり、鬼にタッチされないように必死で逃げたりするなど夢中になって遊ぶ。その中で、ルールや守らなければならない決まりを知ったり、時には決まりを守らない仲間と衝突したりして、様々な感情体験をしていく。

しかし、近年、子供たちが地域で群れて遊ぶ機会は、なくなってきた。主体的に友達とかかわっていける伝承遊びを園で積極的に取り組んでいくことも必要である。

事例2、3、4の身近な自然に触れる体験や生命の尊さに気付く体験から、「思いやり」や「好

奇心、探究心」、生命尊重等「学びに向かう力」が芽生えてくる。日々繰り返しかわる中で、自然の美しさや不思議さに感動したり、愛情を深めていったりするような遊び環境が大切である。

そのためには、何よりも保育者が自然の美しさや不思議さに心を動かし、ワクワクする感性や子供の感動に共感できる感性を高めることである。また、昨今、アレルギー反応が起こる子供が増えている。鳥やウサギなどの飼育動物、草や虫、太陽の光など様々なアレルギーがあるので、それぞれの子供に応じた対応が必要である。

事例5の葛藤や挫折を感じる体験から、「帽子とり」という課題に挑戦し、遊び込む経験の中に、「葛藤、自分への向き合い、折り合い」、「話し合い、目的の共有、協力」等「学びに向かう力」が芽生えてくる。

幼児期の子供は、身体諸機能が著しく発達する時期である。子供の発達に応じて、保育者は遊びの中で、子供が喜んで多様な動きが経験できる遊び環境が大切である。

今回の改訂においても、領域「健康」の内容の取り扱い(2)に「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。」という文書が示された。また、「多様な動き」については、平成24年3月「幼児期運動指針」(文部科学省)の指導のポイントにも明記されている。

その際、子供の動線や安全面への配慮は不可欠である。

事例6、7、8のように、子供は毎日生活する中で、いろいろな音やリズムに出会っている。その出会いを楽しみ、身の回りの音に耳を傾け、感じたことを身体や言葉で表現していく中で、「音等の美しさや面白さに対する感覚」が芽生えてくる。事例6のザリガニ釣りでは、園の自然環境(池)に住むザリガニに興味をもち、試行錯誤しながら捕まえる方法を考え合っている。事例7のどろんこ大好きでは、砂や土、水など身近な自然素材で遊び、心地よさや開放感を味わっている。事例8のアイドルごっこでは、園の空間をステージにして、子供たちは、友達と一緒に遊びながら思ったことや感じたことを表現している。このように子供たちの興味や関心に応じて、園内外の特徴を生かした環境の構成が大切である。

そのためには、保育者が“気付く眼”をもつことである。いつものこと、毎年のこと、周囲にある環境はあたりまえという考えを常に子供の遊びの視点から園内外の環境を見直していく必要がある。

事例9、10のように、自然現象がつくり出す音や色などのタイミングを保育者が逃さないように捉えるとともに、一人一人の感じ方や表現の仕方を丁寧に受け止めていく中で、「音等の美しさや面白さに対する感覚」や「自然現象への関心等」の「学びに向かう力」が芽生えてくる。

友達と一緒に試行錯誤しながら遊ぶことを楽しみながら、友達の遊びを意識し、友達の考えを認め合い、それぞれの力を発揮するなど、協同的な活動の場が重要である。

事例11、12のように高齢者や地域の方々とのかかわりは、「思いやり」や「社会への関心等」の「学びに向かう力」が芽生えてくる。また、『幼稚園教育要領』（平成29年告示）第2章ねらい及び内容の人間関係、3内容の取り扱い（6）に「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人との触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみをもち、人と関わることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること。」と明記されている。今後、子供たちが人と協働して生きていく際に重要な力と考えられる。

## 5 おわりに

本稿の事例を考察した結果「学びに向かう力」は、友達と一緒に遊び込む経験が重要である。また、友達と一緒に共通の目的や目標に向かって協力したり、話し合ったり、工夫したり、試行錯誤したりしながら解決していく協同的な活動が十分できる環境の構成が必要である。友達と長期間かけて遊び込む中で、子供たちは、自分の考えを出したり、友達の考えを受け入れたりしながら、葛藤や新たな発見から楽しさを味わうことができる。保育者は、それらが達成できるように魅力的な環境を構成するよう努めなければならない。

幼児教育は環境を通して行う教育である。子供にとっての環境は、物や人、自然や社会の事象、場や空間、醸し出す雰囲気等である。保育者は、一人一人の子供が自らの興味や関心をもって身近な環境に関わり、様々な活動が展開できるように、保育者の意図や願いを込めて環境を構成している。しかし、環境は一度構成すればよいものではなく、子供の活動の展開により、変わっていくものである。さらに環境は、保育者のみがつくるものではなく、子供と共につくっていくことが大切である。このためにも保育者は、園内外の環境を常に子供の視点から見直す心構えが必要である。また、一人一人の子供を温かく受け入れ、子供に寄り添いながら子供の内面を理解し、信頼関係を築くなど保育者の受容的な関わりは重要である。

このたび、非認知的能力に関わる本稿の中での主な事例としては、“帽子とり”である。「この非認知の力に関する世界的な動向を受けて、日本の幼稚園教育が今後重視すべきことはどのようなことなのか。これについて、無藤（2016）は、三つの課題を指摘している。1 粘り強さや挑戦する気持ちの育成を重視する 2 認知的な力と非認知の力が相互に絡み合うように伸びるサイクルを意識する 3 従来、気質や性格と考えられがちだった側面を「スキル」と捉え、教育可能性を示す」10）と明記している。

今後は、無藤氏が明記している2の課題も視野に入れて、「学びに向かう力」を育む遊び環境について考察を深めていきたいと考える。

## (注)

- 1) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び方策等について（答申）』（平成28年12月21日 中央教育審議会）9頁。
- 2) 前掲『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び方策等について（答申）』9頁。
- 3) 前掲『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び方策等について（答申）』10、11頁。
- 4) 前掲『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（平成28年12月21日参考資料3）。
- 5) 無藤隆（2017）『特集「社会に開かれた教育課程」の実現 論説「社会に開かれた教育課程」と新学習指導要領等』（『初等教育資料』4月号 編集：文部科学省教育課程課 幼児教育課）5頁。
- 6) 前掲 無藤隆（2017）『特集「社会に開かれた教育課程」の実現 論説「社会に開かれた教育課程」と新学習指導要領等』5頁。
- 7) 前掲『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び方策等について（答申）』72頁。
- 8) 編集代表 岡上直子（2017）『ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成～3・4・5歳児の主体的・対話的で深い学び～』（公益社団法人 全国幼児教育研究協会 ひかりのくに）7頁。
- 9) 同上。
- 10) 古賀松香（2017）『論説・事例「非認知の力」と新幼稚園教育要領』（『初等教育資料』9月号）89頁。
- 11) 研究内容等の詳細については下記の文献を参照
  - ① 『幼稚園教育要領』<平成29年告示>文部科学省。
  - ② 編集代表 岡上直子（2017）『ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成～3・4・5歳児の主体的・対話的で深い学び～』（公益社団法人 全国幼児教育研究協会 ひかりのくに）114、123頁。
  - ③ 澤田愛子『園長として大切にしたいこと』（2011）（『幼稚園じほう』3月号 全国国公立幼稚園長会）12～14頁。